

Title	アーレントの『ラーエル・ファルンハーゲン』における「連帯」と「反逆者」について
Author(s)	橋爪, 由紀
Editor(s)	
Citation	人間社会学研究集録. 2011, 6, p.211-236
Issue Date	2011-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/11499">http://hdl.handle.net/10466/11499</a>
Rights	

# アーレントの『ラーエル・ファルンハーゲン』における「連帯」と「反逆者」について

橋爪 由紀\*

## 序

本論では、政治思想家ハンナ・アーレント (1906-1975) の著作『全体主義の起源』第1部「反ユダヤ主義」でのユダヤ人問題と、『人間の条件』などで論じられている「公共性」を、アーレントが書いた伝記『ラーエル・ファルンハーゲン：ドイツロマン派のあるユダヤ女性の伝記』<sup>1</sup>のなかに読み解くことを試みたい。具体的には『ラーエル』での「連帯」と「反逆者」という概念をキーワードとして注目することで、「ユダヤ人問題」と「公共性」の原型となるものを明らかにしたい。

## 1. 『ラーエル・ファルンハーゲン』と執筆の背景

### (1) 『ラーエル・ファルンハーゲン』とラーエル・ファルンハーゲン

『ラーエル』の主人公ラーエル・ファルンハーゲン (1771-1833) は、啓蒙主義時代のベルリンにおいて、詩人で批評家のフリードリッヒ・フォン・シュレーゲル、プロイセンのルイ・フェルディナンド王子と愛人パウリーネ・ヴィーゼルなど、さまざまな著名な人々が集ったサロンを主宰したユダヤ人女性である。交流した人々とのあいだに膨大な数の書簡を残したラーエルをもっとも有名にしたのは、アーレントが『全体主義の起源』に書いているように、ラーエルが中心になってベルリンでのゲーテ崇拝を形成したことである<sup>2</sup>。

『ラーエル』は、アーレントが博士論文『アウグスティヌスの愛の概念』の後で取り組んだ、自分と同じユダヤ人女性であるラーエルについての研究を伝記として

---

\* 大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程 (人間科学専攻)

<sup>1</sup> Arendt, Hannah, 1959, *Rahel Varnhagen: Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik*, München: Piper Verlag GmbH., *Rahel Varnhagen: The Life of a Jewish Woman*, 2000, Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press. ハンナ・アーレント、『ラーエル・ファルンハーゲン：ドイツ・ロマン派のあるユダヤ女性の伝記』大島かおり訳、みすず書房、1999年。以下、『ラーエル』と表記。私はここではPiper出版社の2005年版を使っている。引用ではRVと略記。

<sup>2</sup> ハンナ・アーレント、『全体主義の起源 1』大久保和郎、大島かおり共訳、みすず書房、1974年、110-116頁。Arendt, Hannah, 1951, *The Origins of Totalitarianism*, New York: Harcourt, Brace & Co.

著したものである。この伝記は、いくつかの恋愛と失恋を経験したあとで非ユダヤ人との結婚で同化して念願の上流階級に属することになったラーエルが、ユダヤ性を棄てて成り上がったことで苦悩したのち、晩年になってユダヤ性を肯定するというあらすじになっている。

## (2) 執筆の背景

『ラーエル』は、アーレントがラーエルについて研究をはじめてからほぼ30年の歳月をへて、1958年にその英語版が、翌年ドイツ語版が刊行された。1930年頃にアーレントはラーエルの伝記執筆にとりかかり、1933年にパリに亡命するまでに『ラーエル』全13章のうち最初から第11章までを執筆し、残りの2章を1938年に書き上げた<sup>3</sup>。

アーレントが1933年にドイツを離れたきっかけは反ナチ活動への参加だった。その年の2月27日、ドイツ国会議事堂が放火されて全焼する。翌日ワイマール憲法が事実上停止し、ナチスの独裁権が強化される。エリザベス・ヤング＝ブルーエルの『ハンナ・アーレント伝』によると、アーレントはドイツ国内の反ユダヤ主義的な活動を調査するシオニスト組織に協力して、警察に逮捕、拘留される<sup>4</sup>。運よく8日後に釈放されるが、身の危険を感じて旅行書類もなしにドイツを離れた。

アーレントはラーエルについての研究にとりかかってから伝記脱稿までのほぼ9年間に、最初の結婚、パリへの亡命、離婚などさまざまな人との出会いと別れを経験し、そのあと伝記脱稿から刊行までのあいだにはフランスでの亡命生活、二度目の結婚などの経験を重ねる。アーレントのそれらの経験が『ラーエル』に深く反映している。この本は、アメリカに渡ってから開花し結実するアーレントの政治思想の萌芽が現れている重要な著作になっている。

---

<sup>3</sup> 1958年の秋にアーレントは、その翌年に刊行される『ラーエル』ドイツ語版に向けて序文を書いている。序文の冒頭には「この本の草稿は、私が1933年にドイツを離れた時には末尾の2章をのぞいて出来ていた。その2章を書き終えてからでも、20年以上たっている」(RV9)と記されている。

<sup>4</sup> アーレントは、クルト・ブルーメンフェルトと彼のシオニスト仲間から頼まれて、ドイツ国内の非政府組織、民間団体、企業連合、専門職団体などにおける反ユダヤ主義的活動の広がりを示す資料をプロイセン国立図書館で集めていたところ、一緒にいた母親とともに逮捕される。二人とも8日後に釈放される (Young-Bruehl, Elisabeth, 1982, *Hannah Arendt: For Love of the World*, New Haven & London: Yale University Press, pp. 105-106. エリザベス・ヤング＝ブルーエル、『ハンナ・アーレント伝』荒川幾男、原一子、本間直子、宮内寿子訳、晶文社、1999年)。

### (3) 「重要ではない」本

だが、この本を評価していないとアーレント自身が手紙に書いている。アーレントは『ラーエル』の出版について、彼女の博士論文の指導教官だったカール・ヤスパースに相談するために原稿を送る。原稿を読んだヤスパースから、出版を勧めるのをためらうと記された1952年8月23日付の手紙<sup>5</sup>を受け取ったアーレントは彼に返信する。同年9月7日付のヤスパース宛の手紙でアーレントは、「私にはこの本のこと、もう永いこと、そもそも1933年から、それほど重要ではないのです」と述べて、そのあとさらに「いわゆるこの大問題がそれほど重要ではない、あるいは少なくとも私にはもはや重要ではないのです。歴史的洞察だけなら今でも意義があると思うことは、[...] 全体主義の第1部に載っています」と書いている<sup>6</sup>。「いわゆるこの大問題」というのは、ヤスパースの手紙にある「ユダヤ人の在り方という根本問題 (Grundfragen jüdischen Daseins)」のことで、いわゆる「ユダヤ人問題」である。これは『ラーエル』の主題の一つであり、ヤスパースが手紙で問題点を指摘し、アーレントが返信で反論している。上に引用した手紙で、『ラーエル』の「ユダヤ人問題」についての「歴史的洞察」は「全体主義の第1部」に載っているとアーレントが述べたことについては、本論1の(4)で取りあげることにする。

ところで、上のアーレントの手紙には、『ラーエル』とその内容について3度も「重要ではない」と記されている。「重要ではない」本の出版について果して恩師に相談するだろうか。ヤスパースに『ラーエル』の原稿を批評され、出版を勧めるのをためらうと言われたので、この本は自分にとっても「重要ではない」と応答したのではないか。そうはいふもののアーレントの同じ手紙には、ヤスパースから批評された問題点について、彼女自身が「自己弁護の(そうでなければよいのですが!)この大そうな書簡のとんでもない長さ」<sup>7</sup>と書くほどたっぷりと反論している。重要だからこそ懸命に「自己弁護」するのである。それにアーレントには『ラーエル』を高く評価する友がいた。アーレントの同じ手紙には、ハインリッヒ・ブリュッヒャ

<sup>5</sup> *Hannah Arendt - Karl Jaspers Briefwechsel*, 1985, herausg. Von Lotte Köhler und Hans Saner, München: Piper. S. 231. (134)、『アーレント＝ヤスパース往復書簡 1』、大島かおり訳、みすず書房、2004年、( )内の数字は書簡集の通し番号)。

<sup>6</sup> *ibid.*, S. 237. (135)、(強調は引用者)。

<sup>7</sup> *ibid.*, S. 237. (135)、( )内は原文)。

ーとヴァルター・ベンヤミンに促されて原稿の最後の2章を1938年に仕上げたと記されている<sup>8</sup>。

ベンヤミンは友人のゲルショム・ショーレム宛の1939年2月20日付の手紙に、アーレントと『ラーエル』のことを書いている。

親愛なるゲーアハルト、

ハンナ・アーレントに、ラーエル・ファルンハーゲンについての彼女の本の原稿を君に送るように頼んでおいた。近いうちに届くだろう。

この本には僕は大きな感銘を受けたものだ。教訓的、弁明的ユダヤ研究の流れに抗して力強いストロークで泳いでいるといった感じだ。今日までに読むことができた「ドイツ文学におけるユダヤ人」についてのすべてが、まさにこの流れに流されていたことは、君も先刻承知の通りだ<sup>9</sup>。

『ラーエル』を読んで「大きな感銘を受けた」ベンヤミンは、この本を「教訓的、弁明的ユダヤ研究の流れに抗して力強いストロークで泳いでいる」と言って高い評価を示しているのである。

#### (4) 「ユダヤ人問題」と「公共性」の原型となるもの

1951年に出版された『全体主義の起源』の第1部においてアーレントは、ローマ帝国の時代から現代にいたるまでユダヤ人は絶え間なく迫害され虐殺され続けたという観念を基礎にしたそれまでの伝統的ユダヤ研究の方向を逆転させた。現代につながる反ユダヤ主義は、啓蒙主義時代に一般的になった「ユダヤ民族の特異な性格についての評価の変化」に起因しているが、その変化は「ユダヤ人の自己解釈」において最初に生じたとアーレントは考える<sup>10</sup>。つまり、今日のユダヤ人問題は、近代において生じた、ユダヤ人の在り方を、ユダヤ人自身が位置付け直す際の自己解釈を起源にしていると言うのだ。もちろん紀元前6世紀のユダヤ王国の滅亡から20世紀のイスラエル建国までユダヤ人国家は存在せず、そのことでユダヤ人はおもにヨーロッパ諸国でマイノリティとして生きざるをえず、マジョリティにしばしば排

<sup>8</sup> *ibid.*, S. 233 (135). ブリュッヒャーはアーレントが1940年に再婚した相手で、非ユダヤ人だが共産黨員だったために、反民主主義、反共産主義、反ユダヤ主義を標榜していたナチスの迫害を逃れてドイツからフランスに亡命していた。

<sup>9</sup> ゲルショム・ショーレム編、『ベンヤミン—ショーレム往復書簡』、山本尤訳、法政大学出版局、1990年、379頁。引用した手紙の冒頭の「ゲーアハルト」は、ゲルショム・ショーレムの愛称。

<sup>10</sup> アーレント、『全体主義の起源 1』、iii - iv。

除され迫害されてきた。アーレントが指摘するのは、そのなかで従来の迫害とは性質の異なる反ユダヤ主義という運動の萌芽が啓蒙主義時代に生まれたこと、そしてその運動の契機となったのがユダヤ人の新たな自己解釈だ。

ユダヤ人の自己解釈、すなわち近代において改めて自分たちを選民として位置付け直した経緯をアーレントはこう説明する。「近代反ユダヤ主義の成立と成長は、ユダヤ人の同化の過程、ユダヤ教の古くからの宗教的・精神的内容の世俗化および消滅ということと時を同じくしている」<sup>11</sup>。この同化の過程をみて、ユダヤ民族の存亡の危機だととらえたユダヤ人たちは、「反ユダヤ主義が〈永遠〉であればあるだけユダヤ民族の〈永遠の〉存続は確実」だから、ユダヤ人憎悪を「謂わば強制的な民族保存の目的に利用し得るかもしれない」と考えたのだ<sup>12</sup>。「キリスト教徒のユダヤ人憎悪は事実、ユダヤ教維持のための政治的にも精神的にもきわめて有効な手段だった」<sup>13</sup>とアーレントは述べる。上に引用したアーレントのヤスパース宛の手紙にも、『ラーエル』の「ユダヤ人問題」についての「歴史的洞察」は「全体主義の第1部」に載っていると記されていた。すなわち、『全体主義の起源』で論じられている「ユダヤ人問題」の原型となるものは『ラーエル』にあるということである。

同様に「公共性」についてもその原型を『ラーエル』に確認することができる。「公的領域」もしくは「公的空間」という概念が主題として論じられているのは、『全体主義の起源』のあとで書かれた『人間の条件』<sup>14</sup>（1958年公刊）や『革命について』<sup>15</sup>（1963年公刊）などにおいてである。この概念は、活動と言論に参加する人びとの間に出現する空間であり、政治領域を意味するのだが、アーレントはそれをポリスの住人であるギリシア人たちの自己解釈にみられるものと『人間の条件』で論じている<sup>16</sup>。上に挙げた著作などで「公的領域」という概念を中心に公共性について

<sup>11</sup> 同上書、9頁。

<sup>12</sup> 同上。

<sup>13</sup> 同上。

<sup>14</sup> Arendt, Hannah, 1958, *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press. ハンナ・アーレント、『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年。

<sup>15</sup> Arendt, Hannah, 1963, *On Revolution*, New York: Viking Press. ハンナ・アーレント、『革命について』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1995年。

<sup>16</sup> Arendt, *The Human Condition*, pp.196-199. 『人間の条件』で議論された「公的領域」は、『革命について』において合衆国独立革命時の区制（the ward system）やハンガリー革命時の評議会制（Rátesystem）などに出現したように革命をとおして出現すると述べられている（Arendt, *On Revolution*, pp. 254-255, pp. 261-262）。

考察されているが、アーレントのライフワークと言える「公共性」についての思索が『ラーエル』に現れていると私は考える。『ラーエル』の「連帯 (Solidarität)」と「反逆者 (Rebell)」という概念をキーワードとして注目することでそのことを確認することができる。その際、「ユダヤ人問題」と「公共性」は別個に表れているのではなく、前者によって後者が導き出されていて、それには、1の(2)でみた『ラーエル』の第11章と第12, 13章の執筆の間に流れる5年間という時間と、このあとで述べることになるシオニズムとの隔たりが関係すると考えられる。

### (5) 牧歌的なユダヤ人サロン

『ラーエル』の先行研究については、マルティーン・レイボヴィッチ『ユダヤ女 ハンナ・アーレント：経験・政治・歴史』<sup>17</sup>、ジュリア・クリステヴァ『ハンナ・アーレント：〈生〉は一つのナラティヴである』<sup>18</sup>、ハイディ・トゥワーソン『ラーエル・レーヴィン・ファルンハーゲン：ドイツのあるユダヤ人知識人の生涯と作品』<sup>19</sup>、論集『ハンナ・アーレントとフェミニズム：フェミニストはアーレントをどう理解したか』所収のセイラ・ベンハビブの論文「パーリアと彼女の影：ハンナ・アーレントによるラーエル・ファルンハーゲンの伝説」<sup>20</sup>などが挙げられる。

レイボヴィッチの『ユダヤ女 ハンナ・アーレント』の第1章では『ラーエル』について議論されている。レイボヴィッチは、ラーエルがゲーテを崇拝して、『ウィルヘルム・マイスター』から教えを受けて、成り上がりの道を選ぶことで彼女が捨てたユダヤ性に焦点を当てて論じていて、『ラーエル』自体については論じていない。ク

<sup>17</sup> Leibovici, Martine, 1998, *Hannah Arendt, Une Juive: Expérience, politique et histoire*, Paris: Desclée de Brouwer, マルティーン・レイボヴィッチ、『ユダヤ女 ハンナ・アーレント：経験・政治・歴史』合田正人訳、法政大学出版局、2008年。

<sup>18</sup> Kristeva, Julia, 1999, *Le génie féminin I, Hannah Arendt*, Fayard, ジュリア・クリステヴァ、『ハンナ・アーレント：〈生〉は一つのナラティヴである』松葉祥一、椎名亮輔、勝賀瀬恵子訳、作品社、2006年。

<sup>19</sup> Tewarson Heidi Thomann, 1998, *Rahel Levin Varnhagen: The Life and Work of a German Jewish Intellectual*, Lincoln & London: University of Nebraska Press.

<sup>20</sup> Benhabib, Seyla, 1995, *The Paria and Her Shadow: Hannah Arendt's Biography of Rahel Varnhagen, Feminist Interpretations of Hannah Arendt*, Honig, B. (eds.) 83-104. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, セイラ・ベンハビブ、「パーリアと彼女の影：ハンナ・アーレントによるラーエル・ファルンハーゲンの伝説」『ハンナ・アーレントとフェミニズム：フェミニストはアーレントをどう理解したか』ボニー・ホーニグ編、岡野八代、志水紀代子訳、未来社、2001年。

リストヴァは『ハンナ・アーレント』において、『ラーエル』はアーレントの一種の告白録だという見方がまずあって、その見方に還元しているのである。トゥワソンは、アーレントが『ラーエル』で描いた、ユダヤ人であることを肯定しパーリア<sup>21</sup>としての生を選んだラーエル像を暗に否定し、ラーエルは当時の社会状況には不満をもっていたが、キリスト教徒の家族や友人に囲まれて生涯を満足して終えることができたのだと述べている<sup>22</sup>。トゥワソンの評伝は、ラーエルと距離をおいて客観的にとらえた標準的なものであって、強い解釈をいれたアーレントの『ラーエル』とは対照的な著作だと言える。

ベンハビブは論文「パーリアと彼女の影」のなかで、サロンとポリスの特徴を対比して市民社会が勃興しつつあったラーエルの時代のベルリンのユダヤ人サロンは「公的領域の様式」だと論じている<sup>23</sup>。たしかに『ラーエル』の第3章には貴族や外交官、芸術家、学者たちがラーエルのサロンに集い交流する有様が挿話として描かれている。しかしアーレントは同書の同じく第3章で、「ユダヤ人サロンは、非ユダヤ人との混合の社交（*Geselligkeit*）という繰り返し夢想されてきた牧歌的なものであり、社会の転換期にたまたま配置された所産である」（RV71）と述べており、当時のユダヤ人サロンにおける、人びとが交流する「社交」を積極的に評価しているとは言えない。だがベンハビブがサロンとポリスの共通の特徴として挙げた「参加者の間の平等という前提」<sup>24</sup>は重要な指摘である。老いたラーエルは地球上の人間は平等であるということ認識し、そのことで自分の出自と生を肯定したとアーレントは『ラーエル』の最終章のむすびで描いている。

だがアーレントはユダヤ人サロンに「公的領域」の原型となるものを見出さなか

---

<sup>21</sup> 「パーリア」についてアーレントは『パーリアとしてのユダヤ人』（*The Jew as Pariah: A Hidden Tradition*, *The Jew as Pariah*, ed. Ron H. Feldman, New York: Grove Press, 1978. アーレント、寺島俊穂、藤原隆裕宜訳、未来社、1989年）中のエッセイ「隠された伝統」において述べている。アーレントは、フランスのジャーナリストであるベルナール・ラザールが見いだした言葉である「意識的パーリア」の概念について、「東欧の非解放ユダヤ人大衆の無意識的なパーリア性と比べた場合の解放されたユダヤ人の状態をさしているわけだが、この概念によってユダヤ人は意識的な反逆者として、ヨーロッパすべての非抑圧者の国民的、社会的な自由のために闘い連帯しながら、自らの自由のために闘いを行うような非抑圧的民族の代表者とならねばならない」（同書、47-48頁）と述べている。「意識的パーリア」は、『ラーエル』の「反逆者」に似た概念である。

<sup>22</sup> Tewsarson, *Rahel Levin Varnhagen*, pp. 221-222.

<sup>23</sup> Benhabib, "The Paria and Her Shadow," pp. 99-101.

<sup>24</sup> *ibid.*, p. 100.



った。サロンのような目に見える空間にではなく、目に見えないが絆によって結ばれる「連帯」に「公共性」の原型となるものをアーレントは見出したのではないかと考えられる。ユダヤ人問題の解決へ道をつけるためには、ユダヤ人ラーエルがアウトサイダーとしてもてはやされた、たまたま生まれたサロンに期待するのではなく、アウトサイダーみずからが「反逆者」となって「反逆者」同士が連帯する、そういうところに理想とする「公共性」が出現するとアーレントは考えたのではないかと私は考える。

このあと『ラーエル』の本文に立ち入って「ユダヤ人問題」と「公共性」の原型となるものを提示し、順次検討していきたい。

## 2. 「ユダヤ人問題」

ここではまず『ラーエル』を執筆したアーレントの視点を確認して、そのあとで『ラーエル』から「ユダヤ人問題」の記述を取り出したい。

### (1) シオニズムの同化批判の立場

『ラーエル』執筆とシオニスト組織での活動とは、本論1の(2)でみたように時期的に重なる部分があり、アーレント自身も、1の(3)で引用したヤスパース宛の手紙で「この本『ラーエル』は私の習得したシオニズムの同化批判の立場から書かれていて、いまでも私はそれを基本的には正当だと見ています」<sup>25</sup>と述べている。

アーレントは1933年にドイツでシオニストの活動に協力して警察に逮捕され、亡命した後、1935年にパリのシオニスト組織「ユース・アリヤー」の支部長として働く<sup>26</sup>。そもそもシオニストの組織に関わるようになった理由について、アーレントは

<sup>25</sup> Hannah Arendt – Karl Jaspers Briefwechsel, S. 233 (135), (□内は引用者の補足)。

<sup>26</sup> Young-Bruehl, *Hannah Arendt*, p. 138. 「ハンナ・アーレントは1935年からシオニスト組織アリヤーのフランス支部の支部長としてパリで働いていた。アリヤーは、子供たちや青年がパレスチナで生活する準備をととのえる組織であった」(Arendt, H. / Blücher, H., *Hannah Arendt Heinrich/Blücher Briefe 1936-1968*, herausg. Von Köhler, L. München: Piper 1996, S. 33.)。アリヤー (aliya, aliyah) とは、もともとユダヤ教会でトーラー (Torah ユダヤ教の宗教律法や教え) を朗読するため会堂の朗読台に進み出ることを意味するが、ユダヤ人のイスラエル [パレスチナ] への移住のことを言う。

1964年に西ドイツのテレビのインタビュー番組で語っている。彼女はその番組のインタビュアーであるギュンター・ガウスに、1933年にドイツからパリに亡命したきっかけとなったある出来事に触れて、その機会を与えたのはシオニストの組織だと語ってから次のように述べる<sup>27</sup>。

私は指導者の幾人かと、とりわけ当時の議長クルト・ブルーメンフェルトと親しかったのです。しかし、私はシオニストではありませんでしたし、誰も私をオルグしようとはしませんでした。それでも、ある意味では影響を受けていたのです。とりわけシオニストが自分たちユダヤ民族に対して繰り返し広げていた批判ないし自己批判に共感をおぼえました<sup>28</sup>。

アーレントの周囲にいたユダヤ人のほとんどが同化ユダヤ人だった。アーレントの両親は同化ユダヤ人ブルジョワの出で、父は大学出身者であり母はパリで音楽を学んだ。そして娘のアーレントはユダヤ教に敵対的なキリスト教文化圏で最高の教育を受けた。つまり、アーレント自身が成り上がりの同化ユダヤ人なのである。同化ユダヤ人がシオニストになったのであれば自己批判するのは自然なことである。同化批判に自己批判を重ねて、同化第一世代のラーエルをアーレントは批判した。

それでは「ユダヤ人問題」はどのように書かれているのか、『ラーエル』から取り出そう。

## (2) 「ユダヤ人を人間にしてやろう」

1812年にユダヤ人解放令が出される前、プロイセン官僚のクリスティアン・ヴィルヘルム・ドームの1781年に発表された「ユダヤ人の市民的改善」という論文がどのような経緯で書かれたのか、アーレントは『ラーエル』の第1章で次のように述べる。「抑圧された人びとのためにドームは人間の良心に訴えた。同胞のためにではない、何らかの責務を負っているさる民族のためというのですらない。啓蒙主義の鋭敏な良心にとって、自分たちの下に法的権利のない者がいるということを知ってい

---

<sup>27</sup> アーレントとガウスのインタビュー番組での対談は、1965年に刊行されたガウスの『人物に寄せて』中に「何が残った？母語が残った」という表題の一篇として編まれている（ハンナ・アーレント、『アーレント政治思想集成 1』、齋藤純一、山田正行、矢野久美子共訳、みすず書房、2002年、7頁、Arendt, Hannah, 1994, *Essays in Understanding: 1930-1954*, ed. Jerome Kohn, New York: Harcourt Brace & Company)。亡命したきっかけとなった事件については本論注4を参照されたい。

<sup>28</sup> 同上書、7頁。

るのが耐えられなくなったのだ」(RV21)。そうして啓蒙主義者たちは「ユダヤ人を人間にしてやろう、ユダヤ人がいるなんて、うんざりだ、彼らを人間に、つまり啓蒙主義時代の人間にするしかないのだ」(RV22)と考えたとアーレントは言う。啓蒙主義時代の非ユダヤ人にとってユダヤ人は自分たちと同じ人間ではなかったのだとアーレントは考えているのである。

一方、「人間にしてやろう」と言われてユダヤ人はどう応えたのだろうか。「彼らは感激してみずからの劣等性を認めた。劣っているのは、やつらのせいなんだ、悪意あるキリスト教とその暗黒の歴史が自分たちを劣等にしたのだ、と」(RV22)。アーレントのこの皮肉交じりの突き放した叙述は、同化批判の視点から記されているようにみえる。本論1の(4)でみたように、ユダヤ教の指導者層の人々が反ユダヤ主義を組織存続のために利用したことは、迫害されても致し方がないと受け入れることである。まさに「彼らは感激してみずからの劣等性を認めた」のだ。自分たちは劣等だと言うユダヤ人の自己解釈は、『全体主義の起源』の「ユダヤ人問題」についてのアーレントの解釈に呼応する。アーレントは『ラーエル』で、差別されるユダヤ人をたんに一方的な被害者として書くのではなく、反ユダヤ主義を呼びこみ自然化する道をつけた、富裕な支配者層の同化ユダヤ人に着目したのである。『ラーエル』第7章「同化」の叙述をつぎにみたい。

### (3) 裕福なユダヤ人の同化

もともとラーエルは貴族と結婚して同化することを希望していた。それが1806年のナポレオン軍のプロイセン侵攻とベルリン占領によって、同化しなければユダヤ人には生きにくい社会になった。ただし、「同化はもっぱら裕福なユダヤ人のためにしか存在しなかった」(RV189)とアーレントも指摘しているように、裕福でなくゲットーなどに暮らす大多数のユダヤ人には同化は関係しない。裕福なユダヤ商人の娘だったラーエルは貴族と結婚できなかったが、彼女の従姉妹は貴族と結婚して同化した(RV47)。

1790年代にさまざまな人々が訪れてにぎやかだったラーエルのサロンも、1808年頃には訪れる人もなくなり、それと対照的に興隆するのが「キリスト教徒ドイツ人食卓会」を代表とした愛国主義的なサロンであり、会員には貴族やロマン主義者たちが多く、「その会の規約では女性、フランス人、俗物、ユダヤ人が入会禁止となっている」とアーレントは述べている(RV133-135)。市民的同権を獲得するようになり

<sup>29</sup>、サロンを主宰するほど社会的にも存在感をましてきたユダヤ人を敵役にして、ナポレオン軍に敗北したプロイセンの貴族やロマン主義者たちが中心となって結束をはかったのである。異質な存在を排除して団結を強めていく社会において、ラーエルは完全に孤立することをまぬがれようと愛国的になる。アーレントは、ラーエルが「ユダヤ人なるものを私たちから根こぎせねばなりません」(RV 142)と弟に書いた手紙を引用し、またラーエルの弟たちが受洗して名前を変え<sup>30</sup>、ユダヤ性を剥ぎ取ったことを『ラーエル』に書いている。アーレントは、金持のユダヤ人たちが同化するに至る社会背景について客観的に描いていたが、ラーエルや彼女の家族、周囲の富裕な支配者層の人々が個人的な利をもとめて同化したことをおもに第7章で厳しく批判しているのである<sup>31</sup>。

同化を志向し成功したラーエルを、同化批判のスタンスから批判する叙述がほとんどみられなくなるのは第12と第13章である。そして終章の第13章でラーエルはユダヤ人であることを肯定し、そのことで安らかに逝くことができたと書かれている。『ラーエル』の第12, 13章と最初から第11章までの間に5年という時間的隔りがあり、その間にアーレントはドイツから逃れ、パリで亡命生活を送る。5年後に書き加えられた第12, 13章においてシオニズムの同化批判の視点からのラーエル批判がほとんどみられないのは、アーレントとシオニズムの関係に変化があったことが推察されよう。

つぎの本論3ではアーレントとシオニズムとの関係の変化に注目して、そのあと4で、『ラーエル』に戻って「連帯」という概念に焦点をあてることでその関係の変化が同書にどのように反映されているのか検討する。

---

<sup>29</sup> 市民的同権の必要性については、フランス革命より先んじてプロイセン官僚のドームが政策綱領に定式化したのであり、そしてユダヤ人の社会的同化についてはプロイセン啓蒙主義が最初に軌道にのせたとアーレントは指摘している (RV 136)。

<sup>30</sup> 「弟のルートヴィヒの先例にしたがって、彼女はラーエル・ローベルトと名乗ることに決めた (この同じ姓を彼女の弟たちはみな受洗したあとで名乗るのである)」 (RV 131-132)。

<sup>31</sup> シオニズムの同化批判の視点が『ラーエル』全体に貫かれているわけではない。本論1の(5)で言及したように、ラーエルがベルリンの自分のサロンで多才振りを発揮し、サロンの常客であるプロイセンのルイ・フェルディナンド王子に(精神の助産婦 (eine moralische Hebamme) だと称されるほど、ラーエルとの対話をもとめて王侯、貴族、有名な文筆家たちがサロンを訪れたことが第3章などに記されている (RV 69 - 72)。ただしラーエルの活躍を描写するところでも、アーレントのアイロニカルな語り口がみられる。

### 3. シオニズムとの隔たり

ここではアーレントが書いたビラ「若者たちは故郷に向かう」と未完の論文「反ユダヤ主義」を確認して、アーレントとシオニズムの関係の変化をみる。

#### (1) 「若者たちは故郷に向かう」

アーレントは1935年にパリのシオニスト組織「ユース・アリヤー」の支部長として働き、『ユース・アリヤー』訓練生のグループに同行する仕事を命じられてパレスチナを訪れるなど精力的に働く<sup>32</sup>。ユース・アリヤーでの仕事への情熱は、1935年6月28日付『ユダヤ人新聞』にアーレントが寄稿した「若者たちは故郷に向かう」<sup>33</sup>という題名の、ビラのような文章に現れている。

アーレントはその寄稿文で、迫害されて東ヨーロッパからパリに逃れてきたユダヤ人に向けて、不運な子どもたちが墮落しない一つの解決策は、ユース・アリヤーを訪ね、彼らが教育と職業訓練を受けてパレスチナに入植することだと呼びかける<sup>34</sup>。このビラは、次のような一節で結ばれている。

ドイツでのきびしい試練、移民、亡命生活が青年たちを道徳的に破滅させ、彼らをひどく追従的に、もしくはひどく横柄にした。少年たちは、ちがった環境に置かれるなら、ただちに彼らが自然にもっている尊厳を取り戻す。

予備キャンプで、働いて勉強して、ゲームして歌って、読書して、関心のあるすべての問題について自由討論して数週間過ごせば、彼らは自由と喜びを回復するのだ。そう、彼らは失った若さを取り戻すのだ。

この喜び、この尊厳、この若さが力に変えられ、そしてこの力が国 (the country) をふたたび作るだろう<sup>35</sup>。

上に引用した文でアーレントは、迫害されて故郷も家財も人間の尊厳も失ってパリに亡命した同胞たちに実現の可能性のある希望を示して励ましている。尊厳を失った子どもたちに、教育と訓練を受けて入植に備えよう、とアーレントは呼びかけているのである。パリのシオニスト組織「ユース・アリヤー」の支部長として勤め、

<sup>32</sup> Young-Bruehl, *Hannah Arendt*, p. 139.

<sup>33</sup> Arendt, Hannah, *Some Young People Are Going Home*, *The Jewish Writings*, New York: Schocken books, 2007.

<sup>34</sup> *ibid.*, pp. 34-35.

<sup>35</sup> *ibid.*, p. 37. もともとこのビラはフランス語で書かれている。英訳 the country の原語は不明。

国作りのための人材を育成して、パレスチナに入植しようとする新聞で呼びかけるアーレントは、シオニストとして職務に情熱を傾けている。

ところが、1935年に「ユース・アリヤー」の訓練生たちと共にパレスチナに渡って、その年にパリに戻ったアーレントは、パレスチナの労働村とキブツについて「パリの友人たちには、個人的には留保するものがあると語った」とヤング＝ブルーエルは述べている<sup>36</sup>。アーレントがシオニズムの現実には違和感を覚えたことをこれは示している。

## (2) 未完の論文「反ユダヤ主義」

1938年かその翌年に執筆された未完の論文「反ユダヤ主義」には、アーレントがシオニズムから距離をとって批判的に論じている箇所が見られる。この論文でアーレントは、近代以前の社会に見られた、民衆たちのユダヤ人嫌悪が、近代以降の資本主義社会において、首都の知的エリートたちが先導する形で反ユダヤ主義というスローガンの政治運動へと転換したと見ている。この政治運動へ道をつけたのが、知的エリートであるロマン主義者だけでなく例外ユダヤ人と呼ばれる、ロトシルド家を代表とする金持ちの同化ユダヤ人だと彼女は述べている。この論文「反ユダヤ主義」の序章においてアーレントは、反ユダヤ主義の起源を探究しつつ同化ユダヤ人批判を繰り広げているが、次のようにシオニストに対しても批判している。

シオニストたちは、ユダヤ人の利益を地球規模で代表することはできない。彼らはソヴィエトにおいてユダヤ人に与えられた権利の平等について決して議論せずに、公然と反ユダヤ主義の政府と進んで交渉するのである。表向きは、統一した世界のユダヤ人の利益を守ることで、東ヨーロッパの多数のユダヤ人たちに直ちに關

---

<sup>36</sup> Young-Bruehl, *Hannah Arendt*, p. 139. 上に引用した一節につづけてヤング＝ブルーエルは、アーレントがその30年余り後に、米国での友人で作家のメアリー・マッカーシーにその時の思い出を語った手紙を引用している。「私は今でも、キブツに対する自分の最初の反発をよく覚えています。新しい貴族制だ、と思ったのです。私はその当時でさえ分かっていた、……そこで暮らせるはずがないと。『隣人による統治 (Rule by your neighbors)』、もちろん、これが最終的に行き着くところなのです。それでも平等を信じるなら、イスラエルは感動を与えてくれます」。ヤング＝ブルーエルの注記によると、この手紙は1967年10月7日付でアーレントからマッカーシーに宛てられたものだが、『アーレント＝マッカーシー往復書簡』(*Between Friends: The Correspondence of Hannah Arendt and Mary McCarthy 1949-1975*, 1995, ed. Carol Brightman, New York: Harcourt Brace & Company, キャロル・ブライトマン編、佐藤佐智子訳、法政大学出版局、1999年)においてこの日付の手紙は省かれている。

わる利益を守らずに裏切るのである<sup>37</sup>。

上の引用文においてアーレントは、ゲッソーに暮らす貧しい同胞を支配下に治め、領邦貴族の手先になってその見返りに特権をえる例外ユダヤ人と、貧しい東ヨーロッパのユダヤ人の窮状を斟酌せず、敵である反ユダヤ主義政府と手を組んで、自分たちの集団のみが利益を得るように図るシオニストとを重ねて見ていると読める。組織だけの利益を追求するシオニストも、個人の利益を追求する、同化した例外ユダヤ人も、同じ穴のむじなだとアーレントはとらえていると読めるのだ。

ヨーロッパで迫害され続けたユダヤ人たちのなかで、反ユダヤ主義に対して同化政策は有効ではないと判断してシオニズムに傾倒した者たち、すなわちシオニストの多くはパレスチナに入植するようになる。本論3の(1)で見たようにアーレントも自分の職務として入植に協力した。入植したユダヤ人は、やがて建国して、その地に暮らすパレスチナ人を排除するようになった。マイノリティが連帯してマジョリティとなり、自分たちよりマイノリティであるパレスチナ人を追い出したのである。イスラエルの建国は1948年で、アーレントが「ユース・アリヤー」の訓練生たちとパレスチナに渡った1935年は入植が進行していた段階だった。その地に滞在してさまざまな経験を重ねるなかで、アーレントが活動に参加した当初共感したシオニストの自己批判を、マジョリティとなったその組織の人々に感じとられなくなったのだろうか。本論3の(1)でもみたが、パリに戻ったあとでアーレントは友人たちに、パレスチナで訪れた労働村やキブツを「個人的には留保するものがある」と語った。

1935年にパレスチナに渡るまでシオニストたちと連帯していたアーレントは、ここでみたように彼らとの連帯に距離をおくようになり、その隔たりは『ラーエル』の第12、13章に反映されていると考えられる。それは同書の「連帯」という概念の変化にも現れていると私は考える。

#### 4. 「公共性」の原型となるもの

ここでは1933年に書かれた第11章の「連帯」とその5年後の1938年に書かれ

<sup>37</sup> Arendt, Hannah, *Antisemitism*, *The Jewish Writings*, ed. Jerome Kohn and Ron H. Feldman, New York: Schocken books, 2007, pp. 56-57.

た第13章の「連帯」に焦点をあてて、「連帯」の概念がどのように変化したのかみてみる。第13章では「連帯」だけでなく「反逆者」という概念にも焦点をあて、それらの検討を通して「公共性」の原型となるものを取り出したい。

### (1) 第11章における「連帯」

「連帯 (Solidarität)」という言葉は『ラーエル』のおもに第11章と13章にみられる。第11章の以下の引用において同化第一世代のラーエルがユダヤ人差別に対してなぜ連帯しようとしなかったのかという理由をアーレントは述べている。

普遍化への彼女の情熱、すなわち、最も私的に見えることをあらゆる人々に伝達可能なもの、経験しうるものへと一般化すること、個々人の中に普遍的で人間的なものを感じとること、これらの彼女の抽象化能力はそもそも、特徴的なことに彼女をこれまでである関係から閉ざしてきた。すなわち、彼女はユダヤ人としての宿命の中に人の不運以上のものを決して見ることはなく、彼女の個人的な不幸を一般的な社会的関係の中に決して組み込まず、上流社会を批判することもなく、他の理由から同様に特権階級に属さない人々と連帯することもまったくなかったのである (RV 187 下線は引用者)。

ラーエルの一般化する能力は、上の引用文だけでなく第1章においてもしばしば取りあげられている。そのような一般化能力をラーエルはもっていたのに、ユダヤ人である自分の不幸せをユダヤ人一般の不幸せにつなげられなかった。だからユダヤ人たちの連帯について思いつくことはなかった。その理由をアーレントは次のように考える。

「ラーエルは同化期の第一世代に属していた。第一世代はさまざまな理由から一時期、貴族によって承認されていた」(RV 190)。「一種の特権である」同化が認められたのは金持ちのユダヤ人であり、ラーエルも周囲にいたユダヤ人も裕福であって、彼女はユダヤ人の貧民を知らなかった (RV 189)。1812年にユダヤ人解放令が出されて、同化と解放が進むにつれてユダヤ人は貴族からも市民からも拒絶されるようになる。というのは、信用制度が整備されることで、貴族の融資役をつとめていた金貸しのユダヤ人は無用となったことがまずある (RV 190)。そして、貴族はユダヤ人を「資本主義ブルジョワジーで、土地財産を危険にも動産化する先導者であり、そもそも典型だと見なしていた」(RV 191) からである。市民がユダヤ人を拒絶するのは、もともと彼らは反ユダヤ主義であったところに、彼らにとって権威であり影



響を及ぼす存在である貴族の反ユダヤ主義も取り込んだことによるとアーレントは言う (RV 191)。「この社会的孤立が既成事実となって初めて、ユダヤ人の知識人は革命運動と連帯するのである。ラーエルの当時の状況では、まだそのような連帯はまったく問題外だったのである」(RV 69 下線は引用者)。このようにアーレントは、ラーエルたち同化第一世代が連帯に向かわなかったのは、まだユダヤ人の社会的孤立が既成事実となるまでには至っていなかったからだと考えるのである。

アーレントは『ラーエル』のこの第 11 章までを 1933 年にドイツを離れるまでに書いている。この章でアーレントは「連帯」について、反ユダヤ主義に対しては有効だが、ラーエルの時代ではまだユダヤ人の社会的孤立は認識されていないので一般化能力に優れたラーエルですら思いつかない活動だと一般的な考えを述べているにすぎない。その後 5 年という時間の隔たりが「連帯」についてのアーレントの思考をどのように変化させたのだろうか。1938 年にパリで書き上げられた最後の 2 章のうち、第 13 章に見られる「連帯」を次に取り出してみる。

## (2) 第 13 章における「連帯」

第 13 章の冒頭でアーレントは、ラーエルが若い頃東ヨーロッパに住む親戚を訪ねた時に感じた「恥ずかしさ」に注目している (RV 226)。「ラーエルは恥ずかしいという言葉を出し、帰属を放棄したことで、自分で思っていたよりはるかに多くのものを放棄したのだ」(RV 227) とアーレントはラーエルを批判する。というのは、このことによって「陰鬱な民族集団への帰属感ばかりでなく、彼女の出自であり、運命を分かち合う、プロイセンの例外ユダヤ人たちの小集団との必要不可欠な連帯をも放棄した」(RV 227 下線は引用者) からだとアーレントは述べる。

本論 4 の (1) で見たように、当時のラーエルに「連帯」は思いつかない。だからユダヤ人であることから受ける苦しみを個人的なものだと受け止める。「不機嫌と恐怖から気が狂いそうで、蛇のように巻きつくようなこの絶望、私の身分とこの状況に絶望するのです」というラーエルの苦しみから生じた叫びをアーレントは引用して、「個人的な問題としたとき、ユダヤ人問題は解決不可能」だと言う (RV 227)。

ここでの「連帯」は、本論 4 の (1) で見た第 11 章と同じように反ユダヤ主義に対して解決の可能性のある活動としてとらえられているのに加えて、帰属集団との連帯が強調されている。『ラーエル』の最初から第 11 章まで、ラーエルを含めた裕福な同化ユダヤ人をアーレントは厳しく批判していたが、ここでは「プロイセン

の例外ユダヤ人たちの小集団との必要不可欠な連帯」について語っている。

そして、第12章の中ほどから、これまでしばしば見られたラーエルへの皮肉は影をひそめ、アーレントは、「ユダヤ人でありたいのと同時に、ユダヤ人ではありたくない」(RV 231) という曖昧な状態で揺れて苦しむラーエルに寄り添って、ラーエルの時代の問題としてだけでなく現在の問題としても真剣にユダヤ人問題について考え、どのように生きていったらよいのかラーエルに強く語りかけるように書いている。

ほんとうに同化を望むなら、同時代のユダヤ人憎悪をほとんど逃れられないように、キリスト教も欠くことはできない。両方とも、ヨーロッパ人の歴史的過去の不可欠な要素であり、当時の社会の生きた要素なのである。[...] 全体としてユダヤ人に敵対的な社会では——ユダヤ人の住んでいたすべての国で今世紀にいたるまでそうだった——同化するには反ユダヤ主義に同化するしかないのだ。ふつうの人間 (ein normaler Mensch) になりたいのなら、正確には、他のすべての人々のようになりたいのなら、古い偏見を新しい偏見と取り替える以外にはないだろう。そうしないと予期せぬうちに反逆者 (Rebell) となり——「私は、そうしてきたのに、反逆者なのです」——、そしてユダヤ人のままでいることになる。自分の出自を断固として断ち切って、連帯を断たない人たち、あるいはまだ連帯を断っていない人たちとの連帯を断ってほんとうに同化するなら、ろくでなし (Lump) になってしまうのである (RV 233-234 下線は引用者)。

同化はけっして個人的な問題のみに還元できない。ユダヤ教を棄ててキリスト教を受け入れることはユダヤ人を差別し排除してきたキリスト教文化の歴史も現社会も肯定することになる。「同化するには反ユダヤ主義に同化するしかないのだ」。ユダヤ人を排除してきた「ふつうの人間」になるためには、「古い偏見」であるユダヤ教の代わりに「新しい偏見」であるキリスト教を受け入れるしかないとアーレントは示唆している。たしかに「新しい偏見」を受け入れて大多数の「ふつうの人間」にならなければ、多数者から浮き出て「反逆者」となってしまう。だが自分の出自を否認して「ふつうの人間」になることは、自分の出自を否認しない同胞との連帯を断ち切り、排除する側に与することになるのだ。そういう人間は「ろくでなし」だとアーレントは言う。「ろくでなし」であるのは同化して「ふつうの人間」になる人たちであり、ここで彼らに対置されてポジティブにとらえられているのが「反逆者」である。

伝記の主人公であるラーエルは、その「並外れた賢さと情熱的な本性」(RV 14) などの特性について伝記作者であるアーレントから時に賞賛されているが、同化して

ユダヤ性を棄てたことは批判的に書かれている。同化をめぐる問題で第11章まで同化批判的な立場からラーエルを批判していたアーレントは、この第13章においてラーエルの「私は、そうしてきたのに、反逆者なのです」という言葉を取り上げ、「反逆者」を肯定する。アーレントが引用しているこの一文は、『ラーエル』の中に多数引用されているラーエルの手紙や日記からの抜粋文と同様に引用符で示されているものの典拠が明示されていない。だが、文脈から見てもラーエルの言葉だと読める。この引用文に見られるように、たしかにラーエルは同化して「ふつうの人間」になろうとしたが自分の出自を断固として断ち切れなかったために、大多数の「ふつうの人間」に逆らうような「反逆者」なのだ自ら認めているのである。

### (3) 「反逆者」

この「反逆者 (Rebell)」という言葉は、『ラーエル』の中で上に引用した一節に2回使われて、それ以外は第12章で1回、そして最終章の最後の段落にある「反逆する心 (ein rebellisches Herz)」(RV 237) という言葉に形容詞の形として使われているだけである。いずれも、国家や権威にそむくような大胆な活動家を意味するのではなく、ここで見たように、自分の出自を断つことができずずっと違和感を覚えつづけたために結果的に大勢にとって「反逆者」となった、いわば静的な単独者なのだ。このような「反逆者」としてのラーエルをアーレントは承認している。本論4の(2)で、裕福な同化ユダヤ人もラーエルにとって同じ出自である「必要不可欠な連帯」する同胞だとアーレントはとらえていると述べたが、同化ユダヤ人すべてを彼女は承認しているわけではない。「自分の出自を断固として断ち切って、連帯を断たない人たち、あるいはまだ連帯を断っていない人たちとの連帯を断ってほんとうに同化するなら、ろくでなしになってしまうのである」。アーレントは、「ろくでなし」になる人は承認しない。たとえ同化したとしても、「自分の出自を断固として断ち」切ったりせず、「連帯を断たない人たち、あるいはまだ連帯を断っていない人たちとの連帯を断ってほんとうに同化」しない人であるなら認められるのだ。ラーエルは実際のところ、結婚を機に受洗し、その後夫が爵位を授けられたのでフリーデリーケ・ファルンハーゲン・フォン・エンゼという名前に変え、ファーストネームのラーエルまで抹消してユダヤ人であった痕跡を消している (RV 219)。『ラーエル』の中でそのことにアーレントは言及しているが、「反逆者」としてのラーエルを最終的に承認するのである。

本論2の(1)でアーレントがヤスパース宛の手紙に『ラーエル』がシオニズムの同化批判の立場から書かれていると述べていたことをみた。そして第13章から引用した一節にも同化批判の記述をみた。ただし、ここでは「ろくでなし」でない同化ユダヤ人は批判されていない。アーレントが『ラーエル』を、たとえ同化批判の立場から書こうと意図してその大部分を批判的に書いたとしても、第12章でアーレントは、ユダヤ性を棄てたことで苦悩するラーエルを描き、伝記の最終章である第13章で自分の名前までも抹消した同化ユダヤ人であるラーエルを「反逆者」として承認しているのである。

ところで「反逆者」の「連帯」は、一見矛盾した組合せである。ふつう団結や連帯などの集団行動に馴染まないのが反逆者だと考えられる。だが本論4の(2)で引用した一節でみたように、大多数の「ふつうの人間」にならない少数者は、多数者からみれば「反逆者」である。少数者である「反逆者」との連帯を断たなかったからラーエルは「反逆者」として承認されたのである。「反逆者」同士の「連帯」は、実は『ラーエル』の第12章に描写されていた。そのことをさかのぼって以下で確認しておきたい。

#### (4) ラーエルとパウリーネ、「反逆者」同士の「連帯」

同化ユダヤ人ラーエルに対する批判から承認への変化は、第12章におけるラーエルとパウリーネ・ヴィーゼルとの友情の回復についての叙述から始まると考えられる。パウリーネは本論1の(2)で言及したように、ラーエルのサロンの常客で彼女の友人であり、ルイ・フェルディナンド王子の愛人であった。

『ラーエル』の第12章でアーレントは、ラーエルの書いたパウリーネ宛の手紙を引用する。「私たちはこの世で真実を生きるために創られました…私たちは人間社会のわき (*neben der menschlichen Gesellschaft*) にいます。私たちには居場所も職務も虚栄の称号もないのです！」(RV215 強調は原文)。ラーエルの手紙を引用したすぐあとでアーレントは「成り上がり者になるために、真実を失うはめになる。だが、それをラーエルはしたくないのだ」(RV215)と述べる。アーレントによると、パウリーネは並外れた男性遍歴と金の浪費で、評判の良くない女性だった(RV215)。ラーエルはパウリーネにしばらく連絡をとっていなかったが、「ラーエルがほんとうにもう出世の望みに達するという時に、彼女によれば山を越えた時に——結婚して、受洗して、夫の出世の前に——、つまり最も適当でない時にパウリーネを捜し出し、

定期的に彼女と連絡をとりあい、死ぬまで唯一続く文通を再開した」とアーレントは述べる (RV217)。

『ラーエル』の第11章までアーレントは、貴族との結婚を望み、同化を望み、夫の出世を望み、ひたすら成り上がろうとするラーエルを書いてきた。だが、この第12章において、成り上がりたいが、そのために真実を失いたくない、というラーエルのディレンマを描いている。そこでラーエルが準備したのが、自分と同じように「人間社会のわき」にいて「真実を生きる」パウリーネとの絆を取り戻すことだったとアーレントは解釈している。社会の底辺にいたパウリーネとの交際が、ラーエルと夫の出世の直前に再開されたことをアーレントは肯定的にとらえ、「彼女たちは仲間なのだ (sie gehören zusammen)」(RV217-218)と書いている。

「ふつうの人間」にならずに「人間社会のわき」にいることを選んだ「反逆者」たち二人は、共に (zusammen / together) 属している (gehören / belong)、すなわち「連帯」しているのである。第13章における「連帯」は同胞との連繋が想定されていたが、ここ第12章でのラーエルとパウリーネとの「連帯」は、同胞という閉じた関係にはない。パウリーネは非ユダヤ人であるからだ。二人はそれぞれの「真実を生きる」ことを選んだために「人間社会のわき」にいることになった「反逆者」同士なのである。

### (5) 「反逆者」同士の「連帯」、それが「公共性」の原型となるもの

ユダヤ人であるラーエルは、同化してもユダヤ性を否定せずユダヤ人の自分を肯定して生きる。因習の枠にはまらず自由奔放に生きることが真実であるパウリーネも、そういう自分を肯定して生きる。出自を否定して同化することは、それぞれの真実である個性を殺すことである。少数者が少数者のままで承認しあえる、そういう連帯の基本的条件は、『人間の条件』で「活動と言論がともに基本的条件である人間の複数性は、平等と差別という二重性をもつ」<sup>38</sup>とアーレントが書いた公共性についての条件と重なり合う。「活動と言論がともに基本的条件である」公的領域については、「共に活動し語る (act and speak together)」<sup>39</sup>、もしくは「人びとが共に集合し『協力して活動する』 (people gather together and “act in concert”)」<sup>40</sup>という言葉に置き換

<sup>38</sup> Arendt, *The Human Condition*, p.175.

<sup>39</sup> *ibid.*, p. 203.

<sup>40</sup> *ibid.*, p. 244.

えられて論じられた。

アーレントが公的領域の範例としたポリスについて、同じく『人間の条件』で彼女は次のように語っている。「ポリスの真の空間は、共に活動し、共に語るというこの目的のために共生する人びとの間にあるのであって、それらの人びとが、たまたまどこにいるかということとは無関係である」<sup>41</sup>。このように公的領域は目に見える空間ではなく、「共生する (living together)」、もしくは「共に活動し語る (act and speak together)」人びとの間に生まれるのだ。この公的領域についての叙述と、4の(4)でみた『ラーエル』第12章のラーエルとパウリーネの連帯を示す「彼女たちは仲間なのだ (they belong together)」は類似しており、後者は前者の原型となるものと言えるのではないだろうか。

## 終章 反「均制化」

ナチスの迫害に対してユダヤ人たちが一致団結して連帯行動することが有効だと考えられるにもかかわらず、なぜアーレントがそのような連帯を望まなかったのかについて考える。

### (1) 数の力に恃まない

ナチスが勢力を拡大して1938年3月15日にオーストリアを併合し、同年11月9日にシナゴグやユダヤ人の住宅や商店などを次々に襲撃し放火した反ユダヤ主義的暴動、いわゆる「水晶の夜」が起こった。反ユダヤ主義が激化している状況下でユダヤ人はどのようにして生き延びていったらよいのだろうか。同胞たちとの絆である「連帯」を断ち切らないというだけでなく、同化したユダヤ人もどんどん巻き込んで積極的に連帯して、抵抗しうる活動を行うしか生き延びる道はないのではないか。連帯する人数が多ければ多いほど力を発揮できるのではないかとふつうなら考えるだろう。しかしアーレントはそのように考えなかった。

たしかに1938年に書き加えられた『ラーエル』の第13章において、それまで批判の対象だった同化ユダヤ人が「連帯」する同胞だとしてとらえられているのを見れば、アーレントは数の力に恃もうとしているのではないかと推測される。しかし、アー

---

<sup>41</sup> *ibid.*, p. 198.

レントはすべての同化ユダヤ人を承認したわけでない。同化ユダヤ人に「反逆者」という留保をつけたのである。大多数の「ふつうの人間」になれない、自分の出自にこだわり続ける「反逆者」は、連帯行動に差し障ることがたやすく想像できる。このように集団の連帯行動があらわれやすい状況において、アーレントは、あえて「反逆者」であることが望ましいと考えたにちがいない。というのは、亡命する前にアーレントは、周囲の人々がナチスに同調する怖さを経験したからである。

## (2) 「均制化」への嫌悪

連帯行動へのアーレントの警戒は、ドイツを離れる前に目の当たりにした、知識人たちのナチスへの同一化から生じたと言えるかもしれない。この同一化をアーレントは「均制化 (Gleichschaltung)」とも呼んでいる。これは、ナチスが社会全体を均質化しようとしたスローガンであり、この言葉をアーレントはアイロニカルに用いている。

ふたたび 1964 年にアーレントが出演した西ドイツのテレビのインタビュー番組をとりあげる。アーレントはインタビュアーのガウスに、1933 年にアカデミックな世界と訣別してドイツを離れた理由を述べている<sup>42</sup>。アーレントによると、当時まだ自由意志で選択できる余地があったにもかかわらず知識人たちである友人たちはナチに同一化した<sup>43</sup>。知識人たちのこの均制化の「波のうねりのなかでは、あたかも虚ろな空間が身のまわりを包んだような孤立感にとらわれました。私は知的な環境で暮らしていましたが、他の種類の人間も知っていました。知識人においては均制化はいわば規則のようなものであると確信できたのです」<sup>44</sup>。そして、「二度と帰って来るまい！」<sup>45</sup>という思いでドイツを出たとアーレントはガウスに語っている。彼女の周囲にいた知識人たちは、一般市民よりも早く、うねりを打つようにナチに同一化したのである。

ショーヴィニズムが圧倒的多数となった場合、他者として排除の対象とされるマイノリティがばらばらでは為す術もない。排除を免れ、抵抗していくには連帯しかないのではないか。だが連帯することによってマイノリティからマジョリティへと

---

<sup>42</sup> アーレント、『アーレント政治思想集成 1』、6 頁。

<sup>43</sup> 同上書、16 頁。

<sup>44</sup> 同上書、16 頁。

<sup>45</sup> 同上書、16 頁。

反転すると、マイノリティを排除しようとすることもありうる。ヨーロッパ諸国に住むユダヤ人はどの国でもマイノリティであった。19世紀にパレスチナに移住しはじめ 20世紀になって移住が進展することでその地でマジョリティとなったシオニストたちは、パレスチナ人の居住地にまで入植して先住者たちを排除しはじめたのである。

そのような数を持つ連帯でなく、均制化のように個々人が自由意志を奪われて一つの生命体となるような連帯でもなく、個々人が自由意志をもった「反逆者」でありつつ連帯する。そのような連帯をアーレントは探求した。本論4で見たように、アーレントにとって望ましい「連帯」とは、自分の出自を断つことができず、大勢にとって「反逆者」となった者同士がつながっていることである。そしてまた、ラーエルとパウリーネのように、それぞれの「真実を生きる」ことを選んだために「人間社会のわき」にいることになった「反逆者」同士がつながっていることである。アーレントは『ラーエル』にユダヤ人と非ユダヤ人との間の、出自を超えた連帯を書いた。

そのような連帯が危機的な状況下にただちに力を発揮するとは思われない。ただ、そのような状況で本人がそのつもりはなくとも不意に姿が現れるのが「反逆者」なのだろうが。完全には「ふつうの人間」になりきっていない人にとって「反逆者」は、暗闇の中の灯りのような存在かもしれない。

## 参考文献

- Arendt, H. (1929) *Der Liebesbegriff bei Augustin*. Berlin: J.Springer. 『アウグスティヌスの愛の概念』 千葉真訳 みすず書房
- Arendt, H. (1951) *The Origins of Totalitarianism*. New York: Harcourt, Brace & Co. 『全体主義の起原』 大久保和郎・大島かおり訳 みすず書房
- Arendt, H. (1958) *The Human Condition*. Chicago: University of Chicago Press. 『人間の条件』 志水速雄訳 ちくま学芸文庫
- Arendt, H. (1959) *Rahel Varnhagen: Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik*. München: Piper Verlag GmbH, 1981. *Rahel Varnhagen: The Life of a Jewish Woman*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press. 『ラーエル・ファルンハーゲン: ドイツ・ロマン派のあるユダヤ女性の伝記』 大島かおり訳 みすず書房 『ラーヘル・ファルンハーゲン』 寺島俊穂訳 未来社



- Arendt, H. (1961) *Between Past and Future: Six Exercises in Political Thought*. New York: Viking Press. 『過去と未来の間』 引田隆也・齋藤純一訳 みすず書房
- Arendt, H. (1963) *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*. New York: Viking Press. 『イェルサレムのアイヒマン：悪の陳腐さについての報告』 大久保和郎訳 みすず書房
- Arendt, H. (1963) *On Revolution*. New York: Viking Press. 『革命について』 志水速雄訳 ちくま学芸文庫
- Arendt, H. (1968) *Men in Dark Times*. New York: Harcourt, Brace & Co. 『暗い時代の人々』 阿部齊訳 河出書房
- Arendt, H. (1970) *On Violence*. New York: Harcourt, Brace & Co. 『暴力について』 山田正行訳 みすず書房
- Arendt, H. (1978) *The Jew as Pariah: Jewish Identity and Politics in the Modern Age*. Feldman, R. H. (ed.) New York: Grove Press. 『パーリアとしてのユダヤ人』 寺島俊穂・藤原隆裕宜訳 未来社
- Arendt, H. (1978) *The Life of the Mind*. New York: Harcourt, Brace Jovanovich. 『精神の生活』 佐藤和夫訳 岩波書店
- Arendt, H. (1994) *Essays in Understanding: 1930-1954*. Kohn, J.(ed.) New York: Harcourt, Brace & Co. 『アーレント政治思想集成：理解と政治』 齋藤純一・山田正行・矢野久美子共訳 みすず書房
- Arendt, H. (2002) *Denktagebuch: 1950-1973*. Ludz, U.・Nordmann, I.(eds.) München: Piper Verlag GmbH. 『思索日記』 青木隆嘉訳 法政大学出版社
- Arendt, H. (2003) *Responsibility and Judgment*. Kohn, J.(ed.) New York: George Borchardt, Inc. 『責任と判断』 中山元訳 筑摩書房
- Arendt, H. (2007) *The Jewish Writings*. New York: Schocken books.
- Arendt, H. / Blücher, H.(1996) *Hannah Arendt / Heinrich Blücher Briefe 1936-1968*. herausg.von Kohler, L. München: Piper.
- Arendt, H. / Heidegger, M. (1998) *Briefe 1925 bis 1975*. herausg.von Ludz, U. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 『アーレント＝ハイデガー往復書簡 1925-1975』 大島かおり・木田元共訳 みすず書房
- Arendt, H. / McCarthy, M. (1995) *Between Friends: The Correspondence of Hannah Arendt and Mary McCarthy 1949-1975*. Brightman, C. (ed.) New York: Harcourt Brace &

- Company. 『アーレント＝マッカーシー往復書簡：知的生活のスカウトたち』 佐藤佐智子訳、法政大学出版局
- Arendt, H. / Jaspers, K. (1985) *Hannah Arendt-Karl Jaspers Briefwechsel*. herausg. von Koehler, L. und Saner, H. München: Piper. 『アーレント＝ヤスパース往復書簡 1926－1969』 大島かおり訳 みすず書房
- Benhabib, S. (1995) *The Pariah and Her Shadow: Hannah Arendt's Biography of Rahel Varnhagen. Feminist Interpretations of Hannah Arendt*. Honig, B. (ed.) 83-104. Pennsylvania: the Pennsylvania State University Press. 『ハンナ・アーレントとフェミニズム：フェミニストはアーレントをどう理解したか』 岡野八代・志水紀代子訳 未来社
- ベンヤミン,W./ ショーレム,G. (1990) 『ベンヤミン－ショーレム往復書簡』 ショーレム,G編 山本尤訳 法政大学出版局
- Canovan, M. (1992) *Hannah Arendt: a Reinterpretation of her Political Thought*. England: Cambridge University Press. 『アレント政治思想の再解釈』 寺島俊穂・伊藤洋典訳 未来社
- Ettinger, E. (1995) *Hannah Arendt / Martin Heidegger*. New Haven and London: Yale University Press. 『アーレントとハイデガー』 大島かおり訳 みすず書房
- フランクフル、ヴィクトール・E (2002) 『夜と霧』 池田香代子訳 みすず書房
- 細見和之 (2009) 『「戦後」の思想：カントからハーバーマスへ』 白水社
- カツェネルソン、イツハク (1999) 『滅ぼされたユダヤの民の歌』 飛鳥井雅友・細見和之訳 みすず書房
- Kristeva J. (1999) *Le Génie Féminin: Hannah Arendt*. Fançais: Librairie Artheme Fayard. 『ハンナ・アーレント：<生>は一つのナラティヴである』 松葉祥一・椎名亮輔・勝賀瀬恵子訳 作品社
- Leibovici, M. (1998) *Hannah Arendt, une Juive: Expérience, politique et histoire*. Paris: Desclée de Brouwer. 『ユダヤ女 ハンナ・アーレント：経験・政治・歴史』 合田正人訳 法政大学出版局
- レーヴィ、プリーモ (1980) 『アウシュヴィッツは終わらない：あるイタリア人生存者の考察』 竹山博英訳 朝日出版社
- Tewarson, H. T. (1998) *Rahel Levin Varnhagen: The Life and Work of a German Jewish Intellectual*. Lincoln& London: University of Nebraska Press.

- Villa, D. R. (1996) *Arendt and Heidegger*. Princeton: Princeton University Press. 『アレントとハイデガー：政治的なものの運命』 青木隆嘉訳 法政大学出版局
- Young-Bruehl, E. (1982) *Hannah Arendt: For Love of the World*. New Haven & London: Yale University Press, *Hannah Arendt: Leben, Werk und Zeit*. Frankfurt am Main: S. Fischer Verlag GmbH. 『ハンナ・アーレント伝』 荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳 晶文社

## On ‘Solidarität’ and ‘Rebell’ in Hannah Arendt’s *Rahel Varnhagen*

HASHIZUME Yuki

The purpose of this paper is to understand *Rahel Varnhagen* from the two central themes of Arendt’s main works, *The Origin of Totalitarianism* and *The Human Condition*. One is the theme of antisemitism, or the Jewish Question, which appears in the first part of *The Origin of Totalitarianism*, and the other is that of publicness. In our discussion we focus our attention on two key words, ‘Solidarität’ and ‘Rebell’, which Arendt uses in Chapter 13 of *Rahel Varnhagen*.